

# 主体的に考え自分の思いを豊かに表現する力を育成する「絵に表す活動」の指導の工夫 — 思いと表現の工夫をつなげるための「表現ブック」の活用を通して —

呉市立横路小学校 河村 陽子

## 研究の要約

本研究は、主体的に考え自分の思いを豊かに表現する力を育成する「絵に表す活動」の指導の工夫について考察したものである。文献研究から、本研究では「豊かに表現する力」を、色合い、色の組合せ、濃淡、筆のタッチなどの複数の造形的な特徴を組み合わせながら発想を繰り返し、思いをもって自分なりの表現の工夫を行う力と定義した。この力を高めるために、筆や身近な用具を使った様々な既習の表現と、そこからイメージできることばをまとめた「表現ブック」を活用した授業を行った。児童は「表現ブック」を見ながら、自分の思いを伝えるための表現方法を考えて着彩していった。その結果、児童は自分の思いを具現化するための表現方法を進んで考え、78.3%の作品に表現の工夫が見られるようになった。このことから、「表現ブック」を活用した学習活動を行うことは、主体的に考え自分の思いを豊かに表現する力を高めるために有効であるといえる。

キーワード：絵に表す活動 豊かな表現 思い 表現の工夫

## I 図画工作科について

### 1 図画工作科の役割

グローバル化が急速に進んでいる現在、これからの変化の激しい社会を生き抜くことができる人材の育成を目指して、本県では、平成26年12月に「広島版『学びの変革』アクション・プラン」（以下「アクション・プラン」とする。）が策定された<sup>(1)</sup>。アクション・プランは、知識の習得（インプット）に加えて、知識を活用し、協働して新たな価値を生み出すこと（アウトプット）を重視し、これからの社会を生き抜くために必要な資質・能力の育成を目指した「主体的な学び」の創造をしていくものである。この「主体的な学び」を促す教育活動として挙げられているのが、児童自ら課題を見付け、それをよりよく解決していく「課題発見・解決学習」である<sup>(2)</sup>。図画工作科の学習は、試行錯誤しながら自分なりの表現を追究する課題発見・解決型の学習と捉えられることから、資質・能力を育成するために図画工作科の果たす役割は大きいと考える。

小学校学習指導要領図画工作（平成20年）の目標には、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」<sup>1)</sup>と示されている。

奥原球喜（2000）は、児童が生涯にわたって創造的に生きる基礎となり、児童の人格の形成に関わるような図画工作科の在り方を考えることの大切さを述べている。また、児童が試行錯誤を繰り返して表現することで問題解決能力を育成できることや、表現することによって新たな発見や、できるようになった喜びを感じるなどの経験ができれば、造形活動が「新たな意味や価値をつくりだす教育活動」として、児童の心を育て、人格の高揚を期待できるものになることを述べている<sup>(3)</sup>。

また、川路澄人（2010）は、図画工作科の活動について、「子ども一人一人が見たこと、感じたこと、体験したことといったインプットがあり、それらを基に考えたこと、想像したことの二つを基盤として自分の外にアウトプットしていくことが表現である。」<sup>2)</sup>と述べている。

これらのことから、図画工作科において、児童自ら主体的に自分の思いを表現するために試行錯誤することは、「課題発見・解決学習」そのものであると捉えた。図画工作科は、まさに本県の目指すこれからの社会を生き抜くために必要な資質・能力の育成を目指した「主体的な学び」を行うことができる教科であると考える。

### 2 図画工作科の現状と課題及び研究の動機

福田隆眞（2010）は、小学校においては、「美術の教育」は手段であり、「美術を通しての教育」が目的であると述べている<sup>(4)</sup>。しかし、このことについて、降旗孝（平成23年）は、「図画工作の時間には、上手に作品を描いたり、作ったりしなければならないという強いイメージが児童だけでなく、指導者にも強力に働いており、このことが児童の苦手意識を形成している。」<sup>(3)</sup>と指摘している。

第74回全国教育美術展における児童作品について、玉川信一（2015）は、固定的・觀念的な技法に偏る指導も見受けられたことを挙げ、最終的な作品の魅力は多様な表現の展開に存在すると述べている<sup>(5)</sup>。また、東良雅人（2015）は、「子どもたちが自分自身で描いたすべてのものには、一人一人が心の中に思い描いたものやことが込められています。そこにはその時期だからこそ見えることや、感じ取ることができる“子どもたちの今”があります。だから、どこかに大人の不必要な力が加わるとたちまち子どもたちの“今”が色褪せてしまうのです。」<sup>(4)</sup>と述べている。このように、全国規模の美術展においても、見栄えのよい「上手な作品」をつくるために、大人の指導が入り過ぎている現状があり、図画工作科の目標にそぐわない教師の指導の在り方が問われている。

そこで、稿者自身も長年切り離すことができなかった、教師や児童がもつ図画工作科の強いイメージを払拭し、これらの課題を改善したいと考えた。川路（2010）は、図画工作科と他教科との最も異なる点を、教師が正解をもっていないことだと主張している。そして、子供一人一人の中にその子なりの正解があり、図画工作科における教師の役割は、その正解を導き出す支援を行うことだと述べている<sup>(6)</sup>。

本研究では、児童一人一人がその子なりの正解を自分で見付けられるよう、児童が主体的に考え自分の思いを豊かに表現する力を育成するために有効な指導の工夫について研究することとした。

## II 研究に対する基本的な考え方

### 1 絵に表す活動について

#### (1) 「絵に表す活動」とは

小学校学習指導要領解説図画工作編（平成20年）によると、図画工作科における「絵に表す活動」とは、「自分の表したいことを、形や色、イメージなどを手掛かりに、表し方を考えたり、材料や用具を用いたりしながら作品に表していく」<sup>(5)</sup>活動であると示

されている。また、奥村高明（2010）は、「絵は感覚や感情だけで描かれるものではない。その子の思考や論理もある。」<sup>(6)</sup>と述べている。

つまり、絵に表す活動は、児童が表したいことを様々なことを手掛かりとして、表現の仕方を考えながら表していくものであり、どんな思いを、どのように考えて表現したのかという、その子の思考が伴うものである。

#### (2) 絵に表す活動の課題

国立教育政策研究所が行った小学校学習指導要領実施状況調査教科別分析と改善点（図画工作）（平成27年）によると、想像したことから表したいことを見付けて、三角の形の特徴や構成の美しさなどの感じを考えながら、「風を感じる世界」を絵に表す問題では、79.6%の児童ができていた。しかし、複数の造形的特徴を基に豊かに表現できた児童は37.5%であり、大きな課題が残っていることが分かった<sup>(7)</sup>。

これまでの稿者の「絵に表す活動」の実践においても、特に絵の具などによる着彩の場面で、白い部分をきれいに塗りつぶすことを意識し、白いところをなくすことが完成だと思っている児童に出会ってきた。これらの児童は、「表現する」という意識をもたずに、作業的に漠然と「塗る」活動を行っているように感じられた。

これらのことから、「絵に表す活動」において、児童が自分の思いを表すために、どんな表現をしたらしいのか考えること、つまり、思考を働かせながら表現することに課題があると捉えた。例えば、楽しそうな感じを出すためには、どんな色を使い、どんな塗り方をしたらいいのかなど、複数の造形的特徴を組み合わせながら、体験してきた様々な表現方法を、自分なりに工夫・活用する力が重要である。

そのためには、児童の「思い」と「表現の方法」が思考する中でつながること、また、児童が様々な表現方法の中から、自分の思いに合う適切な表現方法を主体的に選んだり、工夫して活用したりすることが必要となると考える。

### 2 主体的に考え自分の思いを豊かに表現する力について

#### (1) 「主体的に考える」とは

三澤一実（2014）は、「主体とは表現する個人そのもの」<sup>(7)</sup>であると述べている。また、広辞苑によると、「主体的」とは「ある行動や思考などをなす時、その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な立場において行

うさま。」<sup>8)</sup>と意味付けられている。さらに、「平成27年度広島県教育資料」(平成27年)では、「主体的な学び」とは、「授けられた知識を一方的に享受するのではなく、学習者らが能動的に学びを展開すること」<sup>9)</sup>と示されている。

以上のことから、図画工作科において、「主体的に考える」とは、児童自身が表現の主体となって、能動的に自らの意志で考えることと捉える。

## (2) 「自分の思い」とは

「自分の思い」とは、児童がそれぞれ表したいものに対するイメージを広げていくうちに表現したいものに対してもつようになる、具体的なイメージだと考えている。

解説によると、「自分のイメージとは、児童が心の中につくりだす像や全体的な感じ、または、心に思い浮かべる情景や姿などのこと」<sup>10)</sup>だと示されている。また、「自分の思い」に関して、山口喜雄(2010)は、自身の表したい思いは「こころ」であるとし<sup>8)</sup>、新井哲夫(2010)は、絵や立体に表す活動では「こんな感じに表したい」ということを、思いだと述べている<sup>9)</sup>。

これらのことから、自分の思いとは、児童が心の中で、表したいことに対して、様々にイメージを膨らませていくうちに、こんな感じに表したいという、心の中に込み上げてくる、より具体的なイメージであると捉える。

## (3) 「豊かに表現する力」とは

次に、「豊かに表現する力」について述べる。山口県造形教育研究会研究部(2006)は、児童の作品について「形や色、材料に進んで働きかけ、発想を繰り返し、豊かな表現につなげていく指導が感じられる作品を重視していきたい」<sup>11)</sup>と述べている。また、児童がよりよく伝えようとするときには、詳しく描いたり、表情や動作を考えたり、色と調和や変化を考えたりといった、様々なその子なりの工夫が見られるようになると考察している<sup>10)</sup>。

以上のことを踏まえ、本研究では、色合い、色の組合せ、濃淡、筆のタッチなどの複数の造形的な特徴を組み合わせながら発想を繰り返し、思いをもって自分なりの表現の工夫を行う力を「豊かに表現する力」と定義する。

## 3 思いと表現の工夫につなげるための「表現ブック」について

### (1) 「思い」と「表現の工夫」のつながりについて

先述したように、児童は表したいことに対してイ

メージを膨らませる中で、様々な具体的な自分の思いをもつようになる。

「表現の工夫」とは、ただ漠然と色を塗るのではなく、「やさしい感じにしよう」「力強い感じにしよう」などの自分の思いと、「淡い色を水たっぷりの筆で塗ろう」「絵の具だけをたっぷり筆にとって、かすれさせて塗ろう」など、造形的特徴とつなげて思考を巡らし、表現の方法を考えて具現化することであり、豊かな表現につながるものであると捉える。

これらのことから、児童が「思い」をもち、どのように表現したらよいかを考えること、つまり、児童の「思い」と「表現」が思考でつながり、考えることで「表現の工夫」が生まれ、豊かに表現する力を育成できると考える。

「思い」と「表現の工夫」がつながり、行ったり来たりしながら思考を巡らせることで、初めて児童の表したい様々な思いが豊かな表現として具現化されるのである。

### (2) 思いと表現の工夫につなげるための「表現ブック」について

本研究では、児童の「思い」と「表現の工夫」をつなげ、児童が主体的に考えて豊かな表現ができるようにするために、「表現ブック」を取り入れた授業を展開する。これは、児童が自分で試した既習の表現と、そこからイメージできる「やさしい」「はげしい」などのイメージを表すことば(以下、「イメージことば」とする。)」を書き込んで1冊の本にまとめたものである。児童は自分が表現したものを見ながら、「イメージことば」を「表現ブック」に書き込む。活用する際には、自分の思いと表現・ことばを確認しながら発想を膨らませて、表現の手掛かりとする。つまり、「表現ブック」は、表現に特化したその児童だけのオリジナルブックである。稿者は、「表現ブック」について、新しい表現方法を試す度に1ページずつ増やしたり、作品づくりの中で見付け出した新しい表現方法を付け足したりして、進化していくイメージをもっている。今回は、今まで体験しているような表現方法をまとめる時間を確保して「表現ブック」をつくり、授業を行うこととする。

また、「表現ブック」に取り入れる表現方法については、気軽に取り組めるよう、通常の教室で使われて

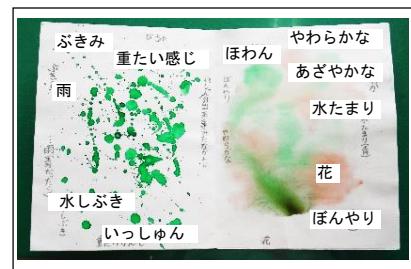


図1 「イメージことば」が書かれた児童の「表現ブック」

いる用具と、一度配付すればずっと使える手軽な用具に絞り、筆とストロー、スポンジを使うこととした。児童の「表現ブック」（児童向けの呼称：「カラフルブック」）を図1に示す。

本研究では、児童が「表現ブック」を活用して、複数の造形的な特徴を組み合わせながら発想を膨らませ、自分の思いを実現するために効果的な表現を考えられるようにする。「表現ブック」活用のイメージを、図2に示す。

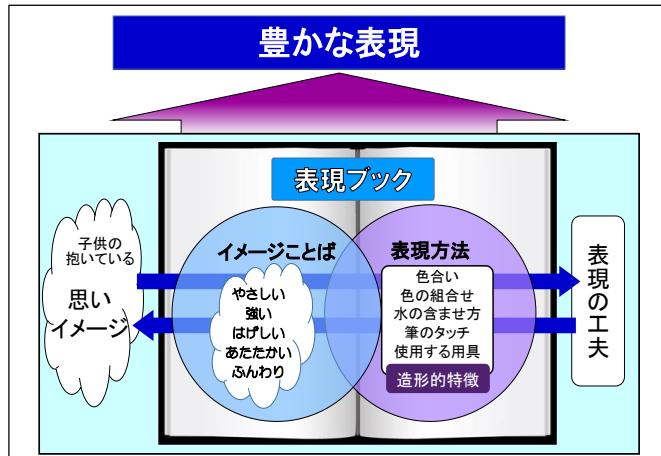


図2 豊かな表現へつながる「表現ブック」活用のイメージ

これらの活動を通して、自分の思いと表現の工夫を結び付けながら、主体的に考え自分の思いを豊かに表現する児童を育成できると考えた。

### III 研究の仮説及び検証の視点と方法

## 1 研究の仮説

「表現ブック」を手掛かりにしながら、思いと表現の工夫をつなげる活動を取り入れれば、主体的に考え自分の思いを豊かに表現する力を高めることができるであろう。

## 2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を、表1に示す。

表1 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
○主体的に考え自分の思いを豊かに表現することができたか。	プレ作品 完成作品 製作カード
○「表現ブック」の活用が、思いと表現の工夫をつなげるために有効であったか。	事前調査 事後調査

### (1) プレ作品・完成作品

プレ作品は、児童が描いた下絵を画用紙に印刷し、

自由に着彩させたものである。完成作品は、「表現ブック」製作後、自分の思いを込めて着彩することと、「表現ブック」を活用しながら着彩することを指導した上で着彩させたものである。完成した二つの作品を比較することで、それぞれの児童の表現方法がどのように変容したかを検証する。

## (2) 製作カード

これは、プレ作品及び完成作品の製作時に、どのようなことを考えながら製作したかを記述したものである。プレ作品と完成作品製作時の記述を比較したものを検証する。

### (3) 事前調査及び事後調査

児童の意識調査では、絵に表す活動や表現の工夫に対する意識の変容を把握するため、四段階評定尺度法及び記述式による意識調査を行う。

#### IV 研究授業について

## 1 研究授業の内容

- 期 間 平成27年6月22日～平成27年6月24日
  - 対 象 所属校第5学年（1学級38人）
  - 題材名 自分の思いを絵の具にこめて  
～魔法のじゅうたんでレッツゴー！～
  - 目 標  
自分の思いを表すための表現に関心をもち、考  
えながら工夫して絵に表すことができる。

## 2 指導計画（全6時間）

時	主な学習活動
1	魔法の絨毯に乗って、どんなところに行きたいか想像を膨らませながら下絵を描く。（プレ作品の着彩は別途行った。）
	「表現ブック」の製作（3時間）
2	「表現ブック」を活用しながら、自分の思いを表す表現方法を考え、工夫して表す。（完成作品の着彩）
3	製作途中の作品を鑑賞し合い、友だちの表現のよさを見付けたり、今後の自分の表現方法を見直したりして、更に工夫しながら着彩する。（完成作品の着彩）
4	出来上がった作品を「作品クイズ大会」で互いに鑑賞し合い、作者の思いと表現の工夫を捉えて、作品のよさや面白さを感じ取る。
5	
6	

### 3 授業の実際と指導の工夫

本題材「自分の思いを絵の具にこめて～魔法のじゅうたんでレッツゴー！～」は、魔法の絨毯に乗って、自分の行ってみたいところ、見てみたい世界、未来の世界などの自分がイメージした空想の世界を絵に表す活動である。児童にとって、想像を膨らませやすく、着彩時には表現の広がりや多様な表現を効果的に取り入れることが期待できる。

事前の意識調査では、着彩時に自分の思いを表すために「表現の工夫を行っている」と回答した児童は81.6%いたが、プールで泳いでいる場面を想定して、そのときの様子が分かるようにどんな工夫をして着彩するかを問う質問では、具体的な表現方法を記述できた児童は31.6%しかいなかった。着彩時に表現の工夫を行っているという児童の意識と実際には、図3に示すように50%もの大きな差が見られた。このことから、着彩時の表現の工夫がどのようなことなのかを児童が理解していないことが分かる。

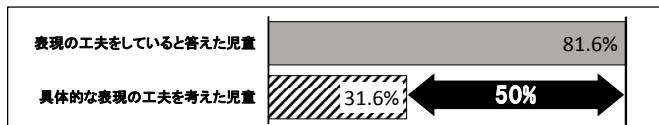


図3 着彩時の表現の工夫に対する児童の意識とその実際  
(事前調査より)

このことを踏まえて、児童が自分の思いを表すために様々な表現方法の中から適切なものを選択し、活用していくよう、次のような工夫を行った。

「表現ブック」には、図4に示したような、今まで体験してきたと思われる10通りの表現方法で描いた。児童は、様々な表現方法を試すことで、体験したことのある表現を思い出したり、その多様性に気付いたりしていた。

- ① ガサガサトントンぬり (絵の具だけを筆につけて、トントン押すように)
- ② ガサガサジグザグぬり (絵の具だけを筆につけて、ジグザグに)
- ③ 水たっぷりちょんちょんぬり  
(水をたっぷり含ませた筆に絵の具を少しつけて、やさしく筆を動かすように)
- ④ なみなみぬり (ケネクネと波のように)
- ⑤ 横一直線ぬり (一直線に同じ方向で)
- ⑥ 放射状ぬり (一点を中心として広がるように勢いよく)
- ⑦ 散らし (たっぷり水を含ませた絵の具を筆につけて散らす)
- ⑧ ぼかし (水を先に塗ってから絵の具をのせてにじませる)
- ⑨ 吹き流し (水たっぷりの絵の具を紙の上に落とし、ストローで吹く)
- ⑩ スタッピング (絵の具を付けたスポンジで押す)

図4 児童が行った表現方法



図5 「表現ブック」を活用して考えている児童

換える活動を行った後で、本授業の着彩を行うこととした。

さらに、製作カードに自分の思い描いた世界を文章で書いたり、何をどのように表現したいかを表現

ブックを見ながら具体的に書かせたりすることで、自分の表したい世界のイメージや思いを明確にもたらせるようにした。

着彩の初めには、全員で「表現ブック」を開いて、体験した表現方法を思い出したり、自分の作品で生かせそうなものはないかを考えたりする時間を設けた。しかし、着彩を始めると、今までの感覚で早く塗ろうとしたり、塗りつぶすことだけに意識が傾いたりして、表現方法を考えずに着彩する児童がいた。そのため、机間指導を行いながら塗りつぶしを行っている児童に対して声かけを行った。さらに、製作カードを再確認するように促したり、児童が描こうとしている対象物の特徴を聞いたりすることで、児童の思いを引き出していた。このような声かけにより、児童は「表現ブック」を開いて対象物を見比べながら、ふさわしい表現方法を自分なりに考えていた。(図6)



図6 ストローを使った表現をしている児童

## V 研究授業の結果分析と考察

### 1 主体的に考え自分の思いを豊かに表現する力を育成することができたか

#### (1) ループリックによる分析

児童のプレ作品、完成作品の分析を表2に示すループリックを基に行った。

表2 作品のループリック

	作品	記述
優れている	○自分の思いを表すための効果的な表現を、色の組合せや既習表現の組合せを考えたり、新たな表現方法を見付けたりしながら着彩しておる、絵からそのことが伝わる。	○考えたことや、新たな表現を見付け出したこと、自分の思いを表すために、よりよい表現を求めて試行錯誤した記述などがある。
合格	○自分の思いを表すための表現方法を考えて工夫して着彩しており、絵からそのことが伝わる。 (表現と思いの記述が一致している。)	○自分の思いと表現を意味づけしながら着彩した記述がある。
もう少し	○表現の工夫は見られるが、思いの記述との関連がない。	○思いを表すための表現方法を考えた記述がある。
努力が必要	○表現の工夫が見られない。	○思いを表すための表現方法を考えた記述がない。
	○表現の工夫が見られない。	○自分の思いを表すための表現方法を考えた記述がない。

図7に示すように、プレ作品では、「合格」「優れている」児童は0%だったが、「表現ブック」を活用した完成作品では、「合格」以上の児童が73%になっ

た。このように「表現ブック」を活用することで、主体的に考え自分の思いを豊かに表現する力を伸ばすことができた。

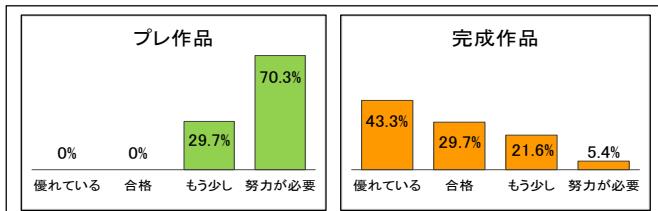


図7 ルーブリックによる評価結果

## (2) 作品と製作カードの比較による分析

表現の工夫の評価が、CからAに変容した児童のプレ作品と完成作品及び製作カードの記述を比較して、図8から図10に示すような表現の工夫が見られる事例を分析した。

### ア A児の作品部分比較による分析

図8は、雲を同じ濃さで塗っていたA児の作品と記述である。プレ作品では、「楽しそうに」という全体的なイメージで捉えて着彩しており、雲のジャンプ台は薄い水色で塗っている。雲のジャンプ台と背景の空の色合いや濃さも同じため、背景と同化して手前の部分があまり目立たず、平面的に見える。しかし、完成作品では、自分が描きたいイメージをしっかり膨らませ、更にどう表現したいかという具体的な思いをもって着彩しており、雲のジャンプ台の塗り方が変化した。濃さや色合いの異なる水色系の絵の具を、「表現ブック」のにじませる方法を活用して表した。自分が納得するまで、何度も水の加減を調整しながら繰り返す姿が印象的だった。この表現の工夫を行ったことで、雲のジャンプ台と自分が空の上で浮き出しているように感じられる作品となった。

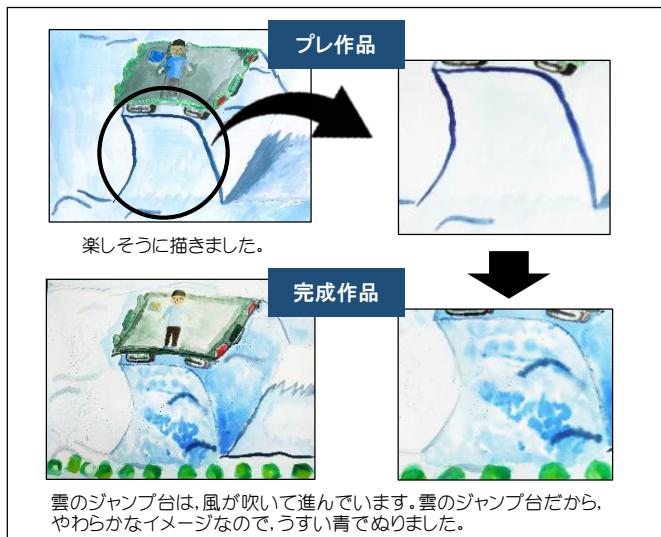


図8 A児の作品と製作カードの記述の変容

### イ B児の作品部分比較による分析

図9で示したB児の作品を分析してみると、プレ作品では、ジェット機の噴射、雲は線描きした通りに塗り、背景も茶で塗りつぶしていた。しかし、完成作品ではジェット噴射の勢いが出るように、炎の勢いを表すために筆を勢いよく動かしたり、その上から絵の具を散らしたりして、「表現ブック」の2種類の方法を活用している。また、自分で表現の工夫を考え、濃さの異なる赤を塗り重ねた。また、雲に着目してみると、プレ作品では灰色一色の塗りつぶしだったが、完成作品では、黄色系の色を使い、渦巻き状の模様を付け加えることで、児童がイメージした「異次元の世界」により近付いているように感じさせる。背景は、濃い茶色から、水をたっぷり含ませた淡い水色で「ちよんちよん塗り」を行うことで、空を飛んでいるような軽さが作品から伝わるようになった。

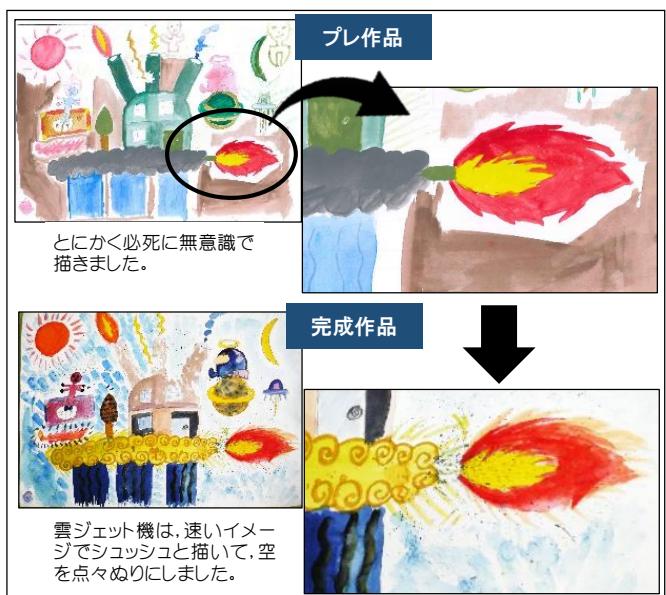


図9 B児の作品と製作カードの記述の変容

### ウ C児の作品全体比較による分析

プレ作品のC評価から完成作品でA評価になったC児の記述と作品の変容を図10に示す。

C児は、プレ作品では惑星や建物などの個別のモチーフを丁寧に塗っているものの、造形的特徴の一つである色のことだけを考えながら着彩している。作品全体の色合いは濃く、はっきりとした色を使用している。完成作品を見ると、太陽は記述にあるように、全体の色合いがにじんで、混ざり合っているような表現に変化した。作品下部の雲は、水を先に塗って、プレ作品よりも淡い色合いの絵の具を後から垂らし、濃淡のあるにじませた表現を行うことで、

イメージ通りのぼんやりとした感じを出すことができている。また、黄色と紺色2色の絵の具を付けたスポンジを回転させて新たな星を付け加えたり、背景に絵の具を散らしたりして、宇宙の不思議な空間を演出している。ほとんどのモチーフの表現方法に変化が見られ、作品全体の雰囲気がC児の思い描いた通りにぼんやりとふわふわ浮いているような感じの作品に仕上がった。

このように、C児は自分の思いを具現化するため、「表現ブック」にある表現方法だけでなく、新たな表現方法を考えて表現の工夫を行うことができた。「表現ブック」を活用することで、イメージも膨らみ、豊かな表現につながっていったと考えられる。



図10 C児の作品と製作カードの記述の変容

これらの作品及び記述の分析から、今まで明確な思いをもたず、表現の工夫を行わずに着彩していた児童が、「表現ブック」を活用することで、主体的に考えて自分の思いを豊かに表現することができるようになったと考える。

## 2 「表現ブック」の活用が思いと表現の工夫をつなげるために有効であったか

IV 3 で述べた意識調査において、着彩時の具体的な表現方法を考えることができた児童の割合を、事前・事後で比較し図 11 に示す。

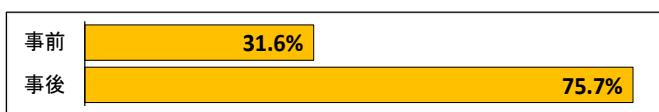


図11 具体的な表現の工夫を考えて記述できた児童の割合

事前調査では31.6%だったが、事後調査では75.7%になり、多くの児童がどのように表現の工夫をすればよいのかを具体的に考えられるようになったことが分かる。

また、実際の作品で分析すると、図12のように、プレ作品では「表現ブック」の内容のような表現の工夫が見られた児童は5.4%であったが、完成作品では78.3%の児童に、思いとつながった表現の工夫が見られるようになった。このことから、着彩する際に、自分の思いを表すために表現の工夫ができるようになったと考えられる。

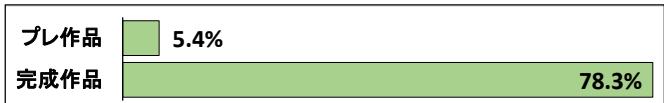


図12 作品に表現の工夫が見られる児童の割合

次に、D児の作品と「表現ブック」活用の様子を図13に示す。D児は、度々「表現ブック」を開いて考えながら着彩を行っていた。作品や記述からも、「表現ブック」を活用することが思いを具現化する際に役立っていることが分かる。

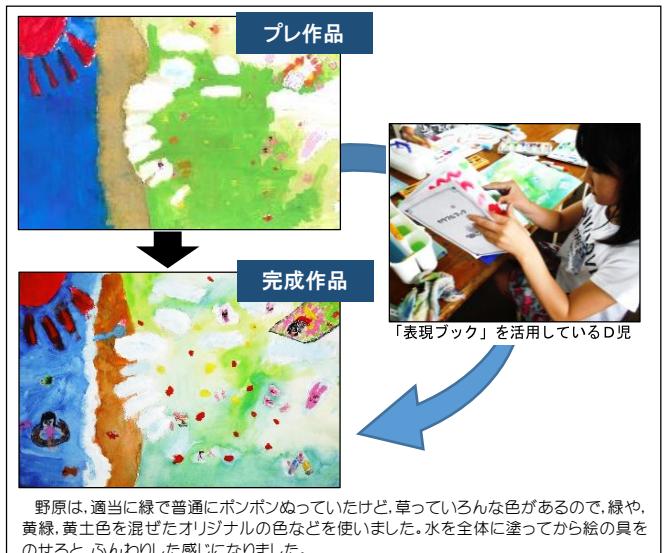


図13 D児の作品の変容と製作カードの記述及び、活動の様子

さらに、事後に行った児童の意識調査では、「表現ブック」について、図 14 のように82.9%の児童が「役に立った」、14.3%が「まあまあ役に立った」と回答していることから、ほとんどの児童が「表現ブック」の有効性を感じていることが分かる。



図14 「表現ブック」に対する児童の意識調査結果

図15に「表現ブック」に対する児童の記述を示す。「表現ブック」が自分の思いを表現する際や、悩んだ時の手立てとなっていることが分かる。

- ・もっと思いが伝わる作品にするためには、カラフルブックを見て、いろいろ工夫したら、もっともっと自分の思いが伝わると思います。それから、スポンジやストロー・水を使つて、ふわふわしている感じをつくりたり、はげしい感じを作ったりして、みんなにも気付いてもらえるようになつたらしいなと思っています。
- ・どのようにするか悩んでいた時に、「表現ブック」を見るところが浮かんだ。
- ・「表現ブック」は役に立ちました。どんな風に表せばいいのかなど分からなかつたときに、様々な仕方がのつてるので、自分の仕方を見付けられました。

#### 図15 「表現ブック」に対する児童の記述

これらの結果から、「表現ブック」を活用して絵に表す活動を行った結果、自分の思いに合う表現方法を考えながら表現の工夫を行うことができるようになったと言える。児童にとって「表現ブック」の活用は、思いと表現の工夫をつなげるために有効だったと考える。

## VI 研究のまとめ

### 1 研究の成果

「表現ブック」を活用した「絵に表す活動」を行うとは、主体的に考え自分の思いを豊かに表現する力を育成することに有効であることが明らかになった。

### 2 今後の課題と展望

- 下絵段階での発想や構想の能力、用具の取り扱いや混色などの着彩時に必要な基礎的な技能にも大きな課題があった。豊かな表現をするためには着彩のみならず、これらの力も不可欠となる。下絵段階で必要なレイアウトや大きさ、動きなどの発想や構想の能力に関しては、この取組を通して気付いた児童もいたので、今後の指導で生かしていくことができると考えている。また、基礎的な技能についても、指導を積み重ねていく必要がある。
- 自分の思いを表現するために考えることが児童に定着するまで、思いを引き出し、表現方法を考えさせる声かけを行っていく必要がある。
- ローラーやブラシなどを使った表現、自分が新たに見付けた表現などを「表現ブック」に加えていくことで、より豊かな表現へつながる表現方法を習得でき、繰り返し活用することで、様々な表現方法が自由に使いこなせるようになると考える。今後も、継続した取組を行っていく。

### 【注】

- (1) 広島県教育委員会(平成27年) : 『平成27年度広島県教育資料』 pp. 4-5に詳しい。
- (2) 広島県教育委員会(平成27年) : 前掲書 pp. 88-89に詳しい。
- (3) 奥原球喜(2000) : 若元澄夫『図画工作・美術科 重要語300の基礎知識』明治図書 p. 290に詳しい。
- (4) 福田隆眞(2010) : 『美術科教育の基礎知識』(四訂版)建帛社 p. 4に詳しい。
- (5) 玉川信一(2015) : 「第74回全国教育美術展 全国審査委員からひとこと」『教育美術2015年2月号』教育美術振興会 p. 68に詳しい。
- (6) 川路澄人(2010) : 新井哲夫外編著『小学校 図画工作科の指導』建帛社 p. 28に詳しい。
- (7) 国立教育政策研究所(平成27年) : 『小学校学習指導要領実施状況調査』文部科学省 p. 小図6に詳しい。
- (8) 山口喜雄(2010) : 新井哲夫外編著『小学校 図画工作科の指導』建帛社 p. 6に詳しい。
- (9) 新井哲夫(2010) : 新井哲夫外編著『小学校 図画工作科の指導』建帛社 p. 47に詳しい。
- (10) 山口県造形教育研究会研究部(2006) : 『子どもの絵は語る 絵からよみとく子どものメッセージ』三晃書房 p. 8に詳しい。

### 【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成20年 a) : 『小学校学習指導要領』東京書籍 p. 83
- 2) 川路澄人(2010) : 新井哲夫外編著『小学校 図画工作科の指導』建帛社 p. 32
- 3) 降旗孝(平成23年) : 「小学校・図画工作を指導している教師の意識と実態－山形県・教育免許状更新講習から－」『山形大学紀要(教育科学) 第15巻 第2号』 p. 199
- 4) 東良雅人(2015) : 「第74回全国教育美術展 全国審査委員からひとこと」『教育美術2015年2月号』教育美術振興会 p. 68
- 5) 文部科学省(平成20年 b) : 『小学校学習指導要領解説図画工作編』日本文教出版 pp. 11-12
- 6) 奥村高明(2010) : 『子どもの世界を鑑賞するまなざし子どもの絵の見方』東洋館出版社 p. 53
- 7) 三澤一実(2014) : 「実践報告書を読んで 主体的を考える『教育美術5月号』」教育美術振興会 p. 27
- 8) 新村出(1955) : 『広辞苑 第六版』岩波書店 p. 1344
- 9) 広島県教育委員会(平成27年) : 『平成27年度広島県教育資料』 p. 89
- 10) 文部科学省(平成20年 b) : 前掲書 p. 19
- 11) 山口県造形教育研究会研究部(2006) : 『子どもの絵は語る 絵からよみとく子どものメッセージ』三晃書房 p. 8